て、当地方の蚊相遷移をどの程度まで推定し得るかは今後の問題である。特に走光性についての各種の比較研究、吸血、産卵等の習性と走光性との関係等が不明である限り結論は下しがたい。又疫学的資料としても、これ以外に Human-bate trap, Animal trap 等による採集を併用し、同時に幼虫採集を行つた上でなければ、利用しがたいと思う。又本調査実施に当り、trap. の性能上採集個体の損傷が甚しく、同定に相当な困難を感じた。殊に *C. trit.* と *C. vish.* の鑑別に難澁し、鱗毛の脱落による斑紋不明の個体は主として翅脈相及び外部生殖器に依つたが、これらも未だ従来の知見が不完全な様に思われた。

〔京都衛生研〕

アカイエカ卵巣濾胞の成長と栄養

細井 輝彦

Hosoi, T.: Nutrition and growth of ovarian follicles of the mosquito, *Culex pipiens pallens*

通常のアカイエカに血液以外の食物を與えて、卵巣発育を促した記録はまだ知られていない。これを確かめるため数年前から各種の人工食物を non-autogenous の蚊に與えて、卵巣の成長を検査したところ、次に述べるような場合に濾胞成長がみられた。カゼインの 5% 溶液を吸つた 37 匹のうち 4 匹に、多数の濾胞が第 2 期に進んだが、成熟した卵は 2 匹にそれぞれ 14 個と 6 個で、いずれも小形であつた。ニワトリ卵の乳剤をやゝ稀釈した食物では、71 匹中 14 匹に卵巣発育を認めた。この中には相当多数の濾胞が外見上正常に成熟したのものがあつた。最も多く育つた 2 個体では 125 個及び 165 個を算えた。この数はほぼ人血を飽食した場合の卵成熟数に相当する。なお、ニワトリの血液では人血よりも遙かに多数の卵が成熟する事実に鑑み、ニワトリの組織中には蚊の卵巣発育に適した物質が含まれているかも知れないと考え、脳・筋肉・肝・脾・腎・卵巣及び精巢等の臓器乳剤をつくり、これらをそのまゝ、及び 5% カゼイン液或いはニワトリ卵乳剤に 1/4 容量あて加えて、蚊に與えた。この実験においては臓器乳剤の原液、カゼイン液、卵液のいずれも単独では蚊の卵巣発育に対して効果を示さなかつたが、精巢或いは卵巣の乳剤とカゼイン液或いは卵液とを混じて與えた蚊では、濾胞の成熟した個体が現れた。但しそれらの成熟卵数はニワトリの血液を與えた時ほど多くはなかつた。実験結果から考察すると、アカイエカ

の卵巣発育には蛋白質と共に何等かの補助的な栄養素が必要とされるように思われる。〔東京工大生物〕

ヤマトヤブカとチョウセンヤブカの関係についての考察

中田 五一

Nakata, G.: Consideration of the relationship between *Aedes japonicus* Theobald and *Aedes koreicus* Edwards

Aedes koreicus は Edwards (1917) によつて朝鮮から記載されたが、彼はその後 Genera Insectorum (1932) に於て、本種を *Aedes japonicus* Theobald の変種として取扱つた。しかし Barraud (1934) は幼虫に於ける相違を指摘して両者を別種と見做し、最近本邦の諸学者も概ね同意見の様である。別種説をとる諸氏が両種の区別点としている形質は、(1) 成虫後脚第 4 跗節白帯が *A. jap.* にはあり、*A. kor.* にはない。(2) 雄外部生殖器側片基葉は、*A. jap.* では不明瞭、*A. kor.* では明瞭。(3) 第 9 腹節両側突起は *A. jap.* では小さく貧毛、*A. kor.* では大きく多毛。(4) 幼虫呼吸管棘は、*A. jap.* では呼吸管毛を超えて末端近くまで分布し、末端数棘の間隔が著しく広いが、*A. kor.* では、管棘が管毛を超えないか、超えても極めて僅かであり、全棘略々等間隔に位置する等の諸点を挙げている。又本邦では、*A. kor.* は北海道から知られているが、内地には分布していないとされていた。所が著者が数年来神戸と京都で採集したものの中には、成虫、幼虫共に *A. kor.* に該当する個体が若干混つており、両者の移行型も認められ、且つ *A. kor.* 型は早春季には比較的多いが、次第に減少し、夏季には *A. jap.* 型ばかりとなる傾向が明かに認められた。又昨年 3 月上旬、京都市内墓地より採集した初生幼虫を、室温、20°C、30°C の 3 温度区で、夫々 27, 28, 25 個体宛飼育し、IV 齡の脱皮殻について、末端管棘が管毛と同位のもの、1 棘が管毛を超えるもの、同 2 棘、同 3 棘、同 4 棘を超えるものを調べた結果、室温では夫々、7, 19, 1, 0, 0 個体、20°C では 1, 14, 12, 1, 0 個体、30°C では 0, 3, 9, 9, 4 個体で、室温と 20°C、20°C と 30°C の間に夫々有意の差が認められた。同じく成虫後脚第 4 跗節が両脚共白鱗のないもの、1 脚のみ白鱗あるもの、両脚共白鱗あるものを調べた結果、室温では夫々、9, 8, 11 個体、20°C では 11, 8, 8 個体、30°C では 9, 0, 0 個体で、室温と 20°C の差は有意でないが、20°C と 30°C の差は有意であつた。以上の結果から、両種の